

17. 高血圧指摘の有無と野菜の積極摂取への留意が食事内容に及ぼす影響 : NIPPON DATA2010

研究分担者 由田 克士 (大阪市立大学大学院生活科学研究科食・健康科学講座公衆栄養学 教授)
研究協力者 近藤 今子 (中部大学応用生物学部食品栄養科学科 教授)
研究協力者 荒井 裕介 (千葉県立保健医療大学健康科学部栄養学科 講師)
研究分担者 尾島 俊之 (浜松医科大学医学部健康社会医学講座 教授)
研究分担者 藤吉 朗 (滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 准教授)
研究分担者 中川 秀昭 (金沢医科大学総合医学研究所 嘱託教授)
研究分担者 岡村 智教 (慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学 教授)
研究分担者 上島 弘嗣 (滋賀医科大学アジア疫学研究センター 特任教授)
研究分担者 岡山 明 (生活習慣病予防研究センター 代表)
研究代表者 三浦 克之 (滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 教授)

1. 目的

高血圧を指摘されていることの有無と野菜を積極的に摂取しようとしていること(積極的摂取の留意)が、実際の野菜・果物の摂取やナトリウム・カリウム等栄養素摂取に及ぼす影響を検討した。

2. 方法

平成 22 年国民健康・栄養調査の対象者であって、NIPPON DATA2010 への参加に同意した者のうち、従前に医療機関等で脳卒中、心筋梗塞、狭心症、腎臓病または腎機能低下、メタボリックシンドロームと指摘されたことがなく、栄養摂取状況調査のデータが存在する(但し、エネルギー摂取量が集団中の 99%タイル値以上と 1%タイル値以下を除く)2,054 人を解析対象とした。このうち、医療機関等で高血圧、糖尿病、脂質異常症の何も指摘されることがないと回答した者は 1,052 人であったが、国民健康・栄養調査当日の血圧測定での正常者は 840 人(N 群)、高血圧者は 212 人(K 群)であった。一方、医療機関等で高血圧のみを指摘されたことがある者は 291 人(H 群)、高血圧に糖尿病か脂質異常症の一方か両方を指摘されたことのある者は 286 人(G 群)であった。ここでは、性・年齢階級別に比較した。

3. 結果

野菜の摂取量は、N 群と K 群の男女ならびに G 群の男性において、積極的摂取の留意群が高値を示した。このうち K 群の積極的摂取の留意群の平均野菜摂取量は男女とも 350g/日を超えていた。果物の摂取量は N 群の男性のみで積極的摂取の留意群が高値を示した。一方、積極的摂取の留意群のカリウム摂取量や摂取密度は全般的に高値かその傾向を示したが、本検討においては、男女とも何れの群間でもナトリウム(食塩相当量)の摂取量に差は認められなかった。

4. 考察

医療機関や健診で高血圧を指摘された者では、現在治療を受けている集団が、現在治療を中断しているか未治療の集団に比べ、野菜を積極的に摂取しようとして留意している者の割合は高く、受診時の食事指導や助言の効果が示唆された。また、現在の治療状況にかかわらず、野菜を積極的に摂取しようとして留意している者の集団は他者に比べ、野菜の摂取量は高値を示したことから、社会全体に対して野菜の積極的摂取を促す環境整備や取り組みの強化が求められる。

第 86 回日本衛生学会学術総会（2016 年 5 月 11 日～13 日 旭川市）発表